

Feel like making love - about infomorph sex

齋藤 路恵

天気が良いらしいので、久しぶりに人格制御装置兼インフォーマ用立体映像投影装置を転がして、メッシュの外に出ることにした。

空はやわらかなオレンジに輝いている。惑星によっては曇りというが、これがタイタンでの晴天だ。光感度と体感温度を少し調整する。ポデイドにとっての暖かい春の陽気というやつになった。頬にあたる風が心地良い。

図書館の前まで来ると、ここでは見かけない服装の人影が見えた。何の気なしにズームする。

—おさげ髪にセーラー服！

図書館の入り口前に立ち、館の上層部と入口を交互に見つめている。

外見年齢は14歳から18歳というところだろうか。わたしは近寄って話しかけた。

[[あの、地球の方ですか?]]

少女の首が少しはねてからこちらを向いた。わたしの姿を確認すると、口角が少し上がったが眉は悲しそうにそのままだ。いや、心も下がった気もする。

[[そうです。よくおわかりになりましたね。もしかしてあなたも?]]

[[ええ。18歳まで地球で過ごしました。あの戦争の後はこちらに]]

[[あら! おわかいのね。きっと優秀な方なんでしょうね]]

わたしはお礼を言う代わりに曖昧に微笑んですませた。

[[何かお困りですか?]]

[[……ええ、図書館の考古学資料を観るのを楽しみにしてきたんですけど、閉鎖中らしくて……]]

わたしのメッシュが自動的に公共放送の周波数に接続した。

[[公的機関からの要請により、図書館を一時閉鎖いたします。ご迷惑をおかけしますが、ご協力お願いいたします。繰り返します。公的機関からの要請により……]]

図書館の前の空中にも同じことを知らせる大きな文字が浮いている。わたしは彼女に話しかけた。

[[残念ですね。半年か1年に一度くらいしかないのですけど]]

[[これってなんなのかしら? とときどきあることなの?]]

[[地元の警察が調査に来るんです。テロリストがデータを隠しているおそれがある、とか理由はいろいろですけど。まあ、いつもあまりたいしたものが見つかりません]]

[[タイタンは大学の自治権が強いと聞いていたけど、案外そうでもないのね。残念だわ……]]

[[観光ですか? それとも何か資料をお探しで?]]

[[観光です。紙の書籍のレプリカに触れると聞いて、どうしても来たくなくて。わたし、これでなかなかの文学少女だったのよ。本棚にぎっしり本が詰まっているのを見るのが好きだったの。上から下までね]]

わたしは深くなずいた。とめどなくノスタルジーが溢れてくることがあるのは、わたしも同じだ。

[[そちらのお洋服は? 学生時代の制服ですか?]]

[[いえ。わたしのころはブレザーだったの。ブレザーって言ってもおわかりにならないかしら。本当はこんな恰好じゃいけないんだけど、図書館に来ると思ったらなんとなくウキウキしてね……。失礼ですけど、地球のどのあたりのご出身?]]

視覚による個体認証という旧式の伝統が残っているせいで、モーフの見目は極力変えないように政府から指導がなされている。もつとも効果は薄いようだ。たいていの人はモーフの外見を一度は変えたことがある。たいていの人は一度くらい赤信号を渡ったことがあるようだ。

[[アジアです。その服をみて、ピンと来たから声をかけたんです]]

[[まあ! もしかして日本のご出身?]]

[[そうです。千葉に住んでました]]

[[うれしい! 私は鳥取よ。海のそばだった。日本出身なん]]

Michie
Saitoh

Like
Feeling
Love

about
Infomorph
SEX

てめったにいないのに!]]

わたしもとてもうれしかった。この御婦人ともっと話してみたかった。

[[あの、よかったです近くでお茶でもどうですか。わたしも図書館内の雰囲気が好きで内装データとか、本の触感データ持っているんで。データだけならお住まいの星にもあるかもしれませんけど]]

[[ありがとうございます。お言葉に甘えることにするわ。わたしは千草・薫よ。あなたは?]]

[[枇杷坂・アテナと言います。日本の名前を聞くのも名乗るのも久しぶりです]]

昼食にも夕食にも半端な時間だったので、学食は空いていた。千草さんはロイヤル・ミルクティーを、わたしはアップル・アイスティーの体感データを注文した。イマジナリー・フードはノンカロリーなので身体のある人にも人気がある。

わたしに唇はないが、映像上の唇をスローに近づけると、微弱な電波が伝わり、唇をすぼめる感覚、吸い込む感覚、飲み物の冷たさや味が脳内(というか人格制御装置内)に再現される。

インフォが対物感応をどこまで上げるかは人によってさまざまだ。わたしはほぼ大学の電腦空間内で生活しているため、あまり対物感応は上げていない。対物感応力をあげたインフォの多くは、肉体をパーツで強化したボディードより繊細な感覚を持っている。ベースから作るものと素体の上に重ねるものの違いだ。調香師などはほとんどが対物感応特化型インフォだ。

対物感応機能が壊れると口をつける前からアイスティーの味がしたり、逆にコップに顔を密着させないと飲んだ感じがしなかったりすることになる。この対物感応の感じわけを、いかに安く、高性能化できるかが人格制御装置開発の一つの鍵となる。

[[イマジナリー・フードが普及してから本当にグルメになったわ]]

千草さんが言った。

イマジナリー・フードのデータは物理的食料よりもずっと簡単に量産できるため、同じ味でも値段が安い。有名店のシェフの味でも簡単に再現可能である。

[[息子たちがね、夏になるとかき氷を食べたがっていたのを思い出したわ。作るのが面倒だね。かき氷器はすごい高級品だってウソをついてたの。氷さえあればかき氷はいくらでもできるから、作るための機械はものすごく高価なんだよって。コンビニでガリガリくんを買っては、ものすごく高級なんだよって騙してた。小学生になったらお母さんの言うことは信用できないって言われたけど]]

千草さんがミルクティーから目をあげて悪戯っぽく笑った。おさげが小さく揺れた。

[[ガリガリくん、懐かしいですね。わたし、たまに記憶データを再現します]]

インフォは食事の記憶からデータを抽出して、脳内再生することができる。ボディードの記憶からも食事の再現はできるが、インフォに比べほんやりした味になるようだ。そのためインフォの食事はボディードの食事の何十倍かの価格であることが普通だ。もともと、記憶からの再生なので、そのときに流れてきた煙草の煙や嘔む回数、飲み込むタイミングまですべて全く同じに再現される。他人に体感データを移すことも可能だが、その場合わたしの食べ方・飲み方を他の人が体感することになる。わたしも恋人の食事の記憶を移してみたことがあるが、食べた後になんとも言えぬ違和感が残った。自分の食事記憶と他人の食事記憶を合成する手法もあるが、味は落ちる。

[[あら! ガリガリくんの体感データなんてあるの! うらやましいわ]]

[[ソーダ味だけなんですけど。ガリガリくんは記憶データですけど、かき氷のイマジナリー・データならありますよ。よかったです一緒に食べますか?]]

店にばれるとまずいので、後半は小さな声でささやいた。

千草さんとの話が予想以上に盛り上がり、シャロンとの約束にだい

ぶ遅れてしまった。自室にとって帰って、いつも待ち合わせに使っているローズ・ガーデン・ルームのデータにアクセスした。

白とピンク、淡い水色を基調にした部屋に着いた。窓からは緑の芝生が見え、少し離れた木の枝から小鳥のさえずりが聞こえる。フランスロココ調をイメージして、シャロンと二人でちょっとずつデータを買った部屋、つまり二人で作った部屋だ。結果としてロココ調とはだいぶ違うものになったけれども……。

部屋の中は静まり返り、小鳥の声を除けば完全な静寂に包まれているようだった。シャロンは待ちくたびれて、自室に帰っているのだろうか? 慌ててシャロンのメッシュに音声通信を飛ばした。いくらか待つと、シャロンの不明瞭な発音が聞こえてきた。

[[……ごめん。本当にごめん。……寝てた。すぐ行くからそこで待って……]]

白いレースのテーブルクロスのかかった机で読書しながらシャロンを待った。机は7人から8人は楽に座れそうな広さがある。10分ほどすると[[準備できた。今から行く]]という声とほぼ同時にシャロンの視覚データも机の向こう側にロードされた。シャロンの頬にはシーツか何かの跡がついている。

[[おはようございます、お姫様。よくお眠りになられたようで。ほっぺたに跡がついておりますぞ]]

[[え?]]

シャロンがびっくりとして両手で顔を覆って、うつむいた。

[[ずっと寝てたの? シーツの跡くらい普通だよ。それよりわたしに何かくれるんだって? 楽しみにして来たんだよ]]

シャロンは大きく息をついてから、顔をあげた。

[[……ああ? うん。そうそう。気に入ってもらえるといいんだけど]]

さっき気づかなかっただけだろうか、いつの間にか暖炉の上にピンクのキラキラした包装紙に赤いベルベットのリボンをかけたプレゼントが載っていた。洋服か何かだろうか? 箱などには入れずに何かやわらかいものをそのまま包んだようだった。

[[もらっているの?]]

[[どうぞどうぞ]]

わたしは暖炉に近づき、包みをとると、すでにテーブルについていたシャロンの隣の椅子に腰かけた。お尻にみっちりビーズを刺繍した白いクッションがあたった。フランス風ではないけど、わたしのお気に入りだ。

[[開けるよ]]

[[早く開けてよ、あっ、でも緊張する]]

[[どっちよ]]と笑いながらわたしが包みを開けると、金色で肩にかかる長さのストレートウィッグが出てきた。手でつかむと細い毛束特有のさらさらした触感と重量感が感じられた!

[[え? 何? これ視覚データだけじゃないの?]]

シャロンが自慢げにいった。

[[視覚データだけなら簡単に手に入るでしょ? これは長さも色も髪の巻き具合もお好みだし。そこらの物理商品よりずっと優れた最高級ウィッグです!]]

味覚や視覚のみの単機能データ商品は品質を問わなければ二束三文で売られている。しかし、たいいていのボディードは、触覚や匂いなど複数の機能を持った物理的な商品に近いデータを好む。データを物理的な商品に近づけ、かつ、物理的な商品以上の機能性を持たせようとする値段は天井知らずに跳ね上がる。安物にも触覚データはあるが、三重の軍手越しに触るようなもので、重量もかなりいい加減だ。わたしがこどものころ何百万円もする腕時計をみたが、このウィッグだってそんなようなものだ。いったいシャロンは何をして、こんなものを手に入れられるだけの社会的評価を得たのだ……。

[[……でも、こんないい品、手に入れるの大変だったでしょ?]]

[[ちょっとね。でも、いいよ! よろこんでほしかったんだもん!]]

シャロンは空気を読めないというか、ときどき頭の悪い小学生みたいなことを言う。ここで受け取れないと言っても、シャロンは困惑してしよ

んまりするだけだろう。ビジネスのときの脳とプライベートのときの脳が断線しているのではないかと、ときどき真剣に思う。わたしはシャロンに気づかれないように小さく息をついた。

[[ありがとう。大事にするね]]

[[ね、ね、良かったらさっそくかぶってみて]]

[[うん。シャロン、先かぶってみる?]]

[[なんでよー。ハヅキに買ったんだから、ハヅキが先にかぶってよー。でも後でかぶらせてね]]

シャロンはわたしのことをハヅキ（葉月）と呼ぶ。以前わたしが日本の古い月の呼び方を教えたところ、シャロンはそれがいたく気に入ららしい。以来わたしは「ハヅキ」になっている。八月生まれだったからだ。

ウィッグをかぶるとしっとり馴染んだ。ロングヘアーのかすかな重みが伝わった。肩にかかる髪の手触りが心地よい。

[[すぐ……。こんなデータ初めて見た……]]

インフォ生活が長いと触覚データに無頓着になってくる。触覚データにこんなに感心するのは久しぶりだった。

[[ね! 梳かしたげる! 鏡の前に行こうよ!]]

鏡台は白い曲線的な枠組みでテーブルの上には香水瓶が置いてある。普段の着替えは視覚データをまっただけなので、鏡台は使わない。単に飾りとして置かれていた鏡台だったが、初めて使うときがやってきたのだった。

[[おー、本当にボディードの髪みたい]]

髪を梳きながらシャロンが言った。ボディードがそういうのだから、本当にそうなのだろう。人に髪を梳かしてもらっている、と感ずるのは何年振りだろう。わたしは目を閉じて感ずるを楽しんだ。

[[気持ちよさそうだねー。なんつーの、ブルーミング?]]

シャロンの冗談で、わたしはシャロンと初めて会ったときのことを思い出した。

シャロンとわたしは大学内のインフォモーフの人権を考える会で初めて会った。最初はボディードだと気づかずに、（確にかわいいけど、どうしてあんなおさるみたいなビジュアルにしたんだろう）と思っていた。シャロンは、明らかに小柄で、ガリガリに痩せていて、椅子に腰かけてひざ上のチラシからときどき目を上げていた。上体を起こさず、目だけを上げるので上目づかいになって、もともと大きな目がよけいにギラギラしてみえた。わたしは凶鑑で見たアイアイというサルを思い出したものだ。アイアイは現地では悪魔の使いとして恐れられていたという。

しかし、その第一印象はあながち間違いではなかったのかもしれない。もう五年の付き合いになるが、いまだにシャロンを不気味に思うことがある。今は平気でも、いつかシャロンはわたしを食い殺したり、平気な顔で利用したりするのもかもしれない……。とてもシャロンには言えないが。

シャロンはその活動で出会った同じボディードの活動家と恋に落ちた。ラブラブだったのだが、いつの間にか活動家は行方不明になり、シャロンはそのころから少しずつ今の彼女の仕事にかかわるようになっていった。彼女の仕事は人道支援ビジネスだと聞いているが、おそらくそれだけではないだろう。当時何があったのか、細かいことはわたしも知らない。未だに聞けない。

[[ね? ね? そろそろ代わろうよー]]

[[……。いい気持ちで寝てたのにー。シャロンはいつも邪魔すんだからー]]

そう言って椅子を立つとシャロンと場所を入れ替わった。シャロンは[[えー、寝る方が失礼じゃなーい]]とブツブツ言っている。ウィッグを自分の頭から外してシャロンにかぶせると、シャロンの後ろの首筋に大きな桜の花びらが見えた気がした。横長の楕円に近い形で淡い紅色をしている。花びらのように片側がすぼまった形をしているが、その輪郭は花びらよりもずっとあまいだ。首筋に大きな桜の花びらを埋め込んだらこのように見えるかもしれない。

頬の「跡」のことを指摘したときに、シャロンの反応がいささか不自然だったのはこのせいだったのか。

[[シャロン、ここ]]

わたしは花びらの上に親指をあて、花びら部分を剥がすかのように

軽く押し上げた。むろん花びらは剥がれなかった。

[[あ……]]

シャロンの視線がひざに落ちた。

[[これ気にしてたのー? そんなに気にしなくていいのに]]

シャロンはわたしの前ではどこか自分がボディードであることを隠そうとしている節がある。わたしがいまだに政府支給のものでさえモーフをもらおうとしないからだ。わたしが自分の身体でセックスをしたことがないのを知ってからは、なぜかとりわけセックスのことを隠そうとする。

確かに総合的であまいな身体感覚に係わることはインフォが最も苦手とするジャンルではあるが。

そのくせときどき泣きながらセックスに関する相談の電話をかけてくる。

わたしは自分の身体でセックスをしたことがない。電脳空間内でならばある。インフォになってからとびきりの追体験用アダルトデータを買ったことも。

まだ、身体があった高校生だったころ、わたしのことを好きだと言う男の子がいた。わたしはたいして好きではなかったが、断る理由がなかったので付き合ってみた。たいして好きではなかったが、嫌いでもなかった。けっこう楽しかった。セックスに興味もあった。

わたしは高校3年の夏に「ひと夏の経験」をしようとしていた。初めてのセックスをしようとしていたということだ。当時のわたしはキスも経験していたし、胸も揉まれていた。

もったいぶっていたのか、実は恐かったのかは今でもわからない。

たぶん、両方だろう。

地球壊滅が来て、わたしたちの生活は跡形もなく消えた。文字通り滝のような津波に押し流され、きれいきっぱり元の生活はなくなった。かくして少女と少年の性欲は藻屑と消えた。生まれるはずだった夏の思い出のみならず、少年の方はバックアップデータも藻屑と消えた。

今、彼のことを覚えているのはわたしだけかもしれない。

ある日突然わたしは蘇り、インフォとしての人生が始まった。

わたしを蘇らせたのは、とある惑星のボランティア団体だった。実際はボランティア団体ではなく、人身売買組織だったのだが。わたしの担当を名乗る人物は[[ご家族やご友人のデータは失われた、あなたはご家族やご友人の分まで生きてほしい]]とわたしに告げた。わたしたちは労働力不足のおりに生きかえらされたインフォモーフ第一世代だった。最初は気が動転して、自分が奴隷候補生だとはわからなかった。しばらくすると、家族のデータも友人のデータも失った、頼るものもない学生だからこそ生きかえらせたのだとわかってきた。成績良好だが、派手なところや反抗心がなさそうな、利用しやすい仔羊たちを生きかえらせようとしたのだ。わたしは彼らからタイタン自治大学への受験を勧められた。資金は自分たちが援助する。学費は就職したら返してくれば良いと。衣食住すべての権限を握っている相手に一人で逆らえる人物がどこにいるのだろうか? 進学できなければどうなるのかもわからなかった。

結果としてわたしたちの世代はもっとも自殺者が多く、もっともインフォ権利運動が盛んな世代になった。現在の穏健派からは叩かれることもあるが、わたしたちを選べる道は限られていたのだと思っている。絶望は死に至る病だ。絶望のあまり、自らのデータを破壊せずにいることは、相当な忍耐を必要とした。あまりにも簡単な方法だったからだ。そのことはインフォ第一世代なら誰でも知っている。

タイタン自治大学に入るとほどなくして、インフォの男性と恋に落ちた。恋に落ちたきっかけがなんだったのかは忘れた。出身が同じだったか、あるいは同じマンガを読んだことがあるとかそんなようなことだったと思う。わたしは、というより、すべてを失ったのに生きかえってしまったインフォたちの多くは、よりどころを求めていた。吊り橋効果、というところと違うが、学内で即席のインフォカップルがいくつも誕生した。

わたしは彼が好きだった。焼け付くように好きだった。

わたしたちにはお互いに忘れたいことと忘れたくないことが多すぎた。わたしたちは互いに辛い過去や辛い恋の告白をした。懺悔は信仰を深めた。どのような形であれ、生き残ったこと、それ自体が罪の

ように感じられていた。それは今でも変わらない。罪を告白するたび、恋は深まった。そうしてわたしたちはカップルになった。

インフォたちは必要以上に連帯した。曖昧な未来の夢と強力な仲間意識がかりげにインフォたちの自我を守った。わたしは、仲間の協力でタイタン自治大学の奨学金を得た。最終的にタイタンの市民権を得られたのも仲間のおかげだ。まだ、インフォ向けのサービスや電脳空間は発達しておらず、わたしたちはすべてを自力で開拓せねばならなかった。今、わたしが持っている電脳空間創造のテクニックの多くは彼から学んだ。シャロンと二人で作った部屋も彼から学んだテクニックの賜物だ。彼は新しいアイデアを形にするのが好きだった。笑うと片方の頬にだけえくぼができた。最初期の対物感応レベルではほほわからなかったけれど、わたしはそのえくぼを指でつつくのが好きだった。彼がわたしの頬を撫でると、わたしは気持ち良かった。わたしが彼の頬を撫でると、彼の喉が猫のように鳴るのではないかと思った。

視床下部も脳下垂体も失ったインフォたちだが、性的なつながりを求める気持ちは強かった。仔羊出身だったわたしたちはセックスになにか「人間的な」ものを感じていた。今となってはその純情さに笑ってしまう。

触覚機能がまだ発達していなかったのも、わたしがかれの体にさわると固く滑らかなプラスチックに触っているような感じがした。熱くもなければ冷たくもなく、ただすべすべとしていた。彼はそれでも触れられていることがわかるらしく、くすぐったそうにしていた。

わたしも彼に触れられた。裸でさわりこするのだから、それは気持ちが良いだろう。体温と同じ温度の水が肌を伝うように、彼がわたしに触れていることしかわからなかった。やっぱりくすぐったくて何度も笑い出した。でも楽しかった。わたしたちはひどく興奮した。つながることを心から欲したが、それは叶わなかった。

彼は記憶再生装置の開発にかかわり、自分が射精したときの感覚をおぼろげながらも追体験できるようになった。わたしは自慰行為の経験はあっても、絶頂に達したことはなかったのが彼がうらやましかった。わたしはわたしの前で彼が達するのを見つめていた。彼は[[オナニー見られているみたいで恥ずかしい]]と照れて笑った。

やがて、追体験用の絶頂アダルトソフトが発売された。今思えば他人の記憶をそのまま再現するような出来が悪い、というか気持ちの悪いソフトだが、わたしたちは飛びついた。インフォだけでなくボディード向けにも作られていたので、陶酔感や絶頂感はかなりのものであった。今でも、よくあんな高品質の記憶を手でできたなあと思う。見られたり、撮られたりしていると思うと興奮するタイプのカップルだったのだろうか？

しかし、どんな素晴らしいソフトもやがて飽きる。わたしたちはお互いに自分の生活が忙しくなり始めていた。わたしは、わたしたちが行った初期インフォ人権運動の活動の総括はまだ難しいと考えている。語っている人もいるが、少なくともまだわたしには語れない。最初期にはわたしたちを救った仲間意識が排他性の源泉となり始めたことが問題の一つだった、とは思う。

急激なインフォ数の増加とそれに伴う電脳空間や商業サービスの拡充、それはつまり植民地と奴隷の拡充ということだった。わたしはたまたま奴隷としては比較的まな位置にいた。タイタン自治大学に進学したことがわたしを救った。連れてこられたのがアメリカ北部で良かった、というところだ。

電脳空間やサービスの拡充はわたしたち第一世代の生活をめずいぶんと改善した。少しずつではあるが、社会的に成功するインフォたちも出てきた。インフォは経済や税収を考えると欠かせぬ存在となり始めた。

彼はインフォ向けサービスの総合商社に出向するようになった。会社の所有者はボディードだ。わたしは人類学を専攻したせいか、儲け話にはあまりお声がかからなかった。Win-Winの関係などと言うが、利用していると感じるか利用されていると感じるかはその人次第だ。ボディードの会社に協力したことで彼を責める人がいるなら、わたしは今でも間違いなく彼を擁護するだろう。他人の人生を軽々しく否定すべきではない。

追体験用アダルトソフトも格段の飛躍を遂げた。性欲にかける人間の情熱はすごいものだと、掛け値なしに思う。年齢・設定・シチュエーションなどは驚くほど細分化された。初体験時の痛みや失敗を体験できるソフトも売られるようになった。台なしになったセックスを、さまざまなシチュエーションからランダムに盛り込むソフトウェアも作られた。あらかじめ予定された失敗だ。でも、それはいったい誰の失敗なのだろうか？

やがて彼が忙しくなってきたから、セックスの回数を減らそうと言いだした。彼の言葉が本当だったのかは知らない。たぶん、本当に忙しかったのだろう。向こうから言ってもらったので助かった。

次々に高機能なセックスのソフトが開発されても、当時のわたしと彼はボディードのような屈託のないセックスはできなかった。それは、身体のないセックスがむなしということでは全くない。インフォたちのためにそこは強調しておく。そうではなく、それはわたしたち固有の問題だった。ボディードに与えられた価値観を捨てきれない自分たちに我慢ならなかったのだ。

当時は、ボディードのインフォへの蔑視は現在よりもずっと激しかった。ボディードの間では身体のあるセックスこそが、真のセックスだとされていた。どんなに高機能のアダルトソフトであろうと、それは誰かの感覚の合成の産物だ。わたしは初めての痛みや、男性器がうまく入らなかつたりするような失敗は体験できなかった。わたしはセックスで常に絶頂に達したけれど、彼だけの唇がほんとうにそこにあると、感じる事ができなかった。

今思えば、ボディードの雑音なんか無視すればよかったと思う。でも、当時は無視がどうしてもできなかった。わたしはそれがコンプレックスだった。自分固有の身体経験というものを追い求め、死んだ子の年を数え続けてしまう自分に耐えられなかった。

彼は性欲データへのアクセスを減らすよう調整したいと言っていた。ほどなくして、会う機会が減り、二人は自然消滅した。

タイタン政府が「すべての精神に肉体を」というスローガンで本格的にモーフの供給を始めたのはそれからだった。

インフォどうして話しているときどき盛り上がる。

[[肉体ですげー不便だもん。みんな、そのうちインフォになるよ]]

最初からデジタルデータで情報を処理するインフォに比べ、アナログデータを一度デジタルに変換するボディードの処理は若干遅い。だが、大量にそれを繰り返すと、それは少しずつ決定的な処理能力の差に変わっていく。シャロンのように特殊な職業であれば、なるほど身体はいるかもしれない。それに代わって人型にこだわる必要なんかないのだ。そもそも、身体を完全に機械化したらもうそれは人格制御装置が派手になったインフォでしかない。本人が自分をボディードと思っているか、インフォと思っているかの違いだ。たいいていのビジネスパーソンは電脳空間の職場で働くのだから、肉体の維持などは何の意味もないとしか思えない。実際、著名なビジネスパーソンの中には自ら身体を捨てる人もいる。

とはいえ、世の中の権力は圧倒的にボディードに集中している。“大破壊”以前からの権力の流れを継ぐ保守的なボディードの一派の力が特に強い。

「インフォはどこにでも入り込んでわたしたちを監視している」

「インフォは電脳空間で結束し、ボディードを絶滅させようとしている」

「インフォはあらゆる情報を統合して、万能知性体を作ろうとしている。神を創造しようとしている。なんたる冒険だ」

——などなど、ボディードのインフォに関する妄想は尽きるころを知らない。だからわたしたちは人格制御装置兼インフォモーフ用立体映像投影装置などという不便なものを保持し続けざるを得ない。まあ、すべてをメッシュ上においておく情報漏洩が怖い、ということもあるのだが。

ボディードの多くが進んで身体を捨て始める日も、いつか来るかもしれ

れない。しかし、その日はだいぶ遠そうだ。わたしのバックアップが消える／消される前にそういう日は来るだろうか。

シャロンは望んで、バックアップをとらない変わり者だ。「生の輝きを薄めないため」と本人は言っている。なんとなく気持ちはわかる。本人がスリルシーカーなだけなのじゃないかと思うときもある。シャロンは過去にさんざんやりたくないセックスをさせられたらしい。細かいことは本人が話したからない。もっともいつかわたしに話したいとも言っている。今はたくさんのセックスフレンドを持って、心が弱ってしまったときの支えにしているらしい。本人曰く「中毒」だ。

[[なんか…ごめんね]]

シャロンが視線をひざに向けたままつぶやいた。

[[気にするなって言ってんじゃーん。気にされると、かえってわたしが気になるよ! そうだ! シャロンの髪おさげにしてあげる。昔の地球ではやった髪形で、超ダサくてかわいいよー!]]

[[えー?]]

[[それから、あとでお茶飲もうー。二人の休みが合うときなんて、めったにないんだから、思い切ってウイスキーとか入れるのどう?]]

わたしはシャロンのほっぺの肉をつまんで引っ張った。シャロンは[[わかっぱよ。もう気にひない]]と言って、頬をつままれたまま笑った。

ウィッグは黒髪のおさげになってシャロンの頭に乗っかり、次はそのまま外されて再びわたしの頭に乗つけられた。

二人でさまざまな髪形をとっかえひっかえ試した後、テーブルにつき、ティーセットを準備した。イマジナリー・フード・データだからティーセットはいらないのだが、やはり何事も雰囲気肝心である。

[[本当にウイスキー入れちゃう?]]

わたしが聞くと、シャロンは[[本気でー?]]と言いながらうなずいた。アルコールソフトの感度は酷酷に設定した。

酔ってくると、なんとなくシャロンの首筋の花びらのことが思い出された。そうか、シャロンは、ごく最近、あるいはここに来る前まで誰かとセックスしていたのかな。

花びらは今の位置からは見えないが、場所ははっきりと思い出せた。わたしの視線は首から胸元に流れた。おっぱいちっちゃいと乳首もちっちゃいかな。

[[……さっきからなんか考えてるんだね?]]

シャロンに突っ込まれた。シャロンの声の調子からすると性的なことだとはばれていないらしい。

[[……んーとね……シャロンとセックスしたいなーって思ってた]]

なぜか中途半端な冗談をこぼしてしまった。シャロンの丸い目が一層丸くなり、それから怖いような真剣なまなざしになった。

[[……いいよ。わたしもハツキとセックスしたい]]

自分から言い出したのに、何が起きているのかわからなかった。血液もないのに体中の血が逆流したかのようだ。シャロンの乳首、へそ、ウエストのくびれ、下腹のふくらみ、陰唇の色と匂い、すべてのイメージが一瞬にして脳内を駆け巡った。シャロンの乳首を甘噛みする自分のイメージやシャロンの陰毛に顔をうずめる自分のイメージも。

[[……あ……えーと……ごめん、わかんなくなっちゃった……]]

なんとかそれだけ言った。シャロンは刺すようなまなざしでこちらを見ている。猿のようなぎよろぎよろした目が光っている。アイアイの瞳。

[[……あの……わたしたち友達じゃない? その関係は壊さない方がいいよ……]]

シャロンはわたしの発言を最後まで聞いてから落ち着いた声で返した。

[[どういふこと? 友達とセックスしちゃいけないの? わた

し、ハツキと友達でいる自信あるよ]]

[[……だから、そうじゃなくて! シャロン後悔してるときだっていっぱいあるじゃん。いまだにときどき『さみしさだけで、寝ちゃった。どうしよう』って通信してくるじゃん! わたしがいなくなったらシャロン本当にそういうことできる友達じゃなくなっちゃうじゃん!]]

シャロンは微動だにせずわたしの方を見ていた。わたしの方が耐え切れなくなって、視線をティーカップの底に移した。一口分だけ残った紅茶が、カップの底をかううじて覆っている。ひどい断り方だ。意図はどうあれ、自分から言い出したのに。

どれくらい時間が経ってからかわからない。シャロンの方が口を開いたので、わたしは顔を上げた。

[[……じゃあ、次会うときまで考えよう。わたしも考えるから、ハツキも考えて]]

なんと返したらいいのだろうか。この話はずっと続くのか。

[[ね?]]

シャロンがにっこりと作り笑いをして言った。真剣なまなざしは、普段のまなざしにまだ戻らない。

[[……うん、わかった]]

[[ありがとう! じゃあさ、公園行こうよ。日が暮れないうちに]]

シャロンはとびきりの笑顔で言った。シャロンのまなざしはいくらも普段の色に近づき、得意げな勝利の色が混じっていた。今でははっきりとシャロンの方に会話の主導権があった。

土地が実質上無限なので、電脳空間の公園はやたらと広い。公園内は誰もが自由に開発できるようになっているため、ときどきベンチが増えたり、ピンク色のリスが出たりする。人気のある広場は常にマイナーチェンジを施されているが、隅っこの方は放置された場所も多い。いったい何年前のソフトで開発したのだ、という人っ子一人いない野球場の風景を楽しむこともできる。公園内はおおむね地球でいう春の気候に保たれている。

わたしとシャロンはメインの広場を出てぶらぶらすることにした。

[[この公園に桜植えたって言ってなかった?]]

歩きながらシャロンに聞かれた。

[[うん、もっと端の方。今は咲いてないけど見に行く?]]

他の人たちといっしょにと作った桜並木は一年に一度しか咲かないように設定した。やはり咲きっぱなしでは風情がない。

桜の木は例年と変わらぬ深い緑を生い茂らせて、木陰を作っている。わたしは花の時期も好きだが、萌黄色の新芽が出るころや、深緑の葉が茂り始めるころも好きだ。

[[どのへんに植えたの?]]

[[……そこらじゅうあちこちいっぱい。一本だけちょっと咲かせてみようか]]

久しぶりに桜のデータにアクセスして、満開から散り始めのころに合わせた。風が吹くたび淡い色の花びらが少しずつ風に舞った。

[[全部咲いたら道が真っ白になるの? きれいでしょね]]

わたしはうなずいて、シャロンに説明した。

[[卒業とか入学シーズンの花なの]]

[[お墓の代りに植えるんだっけ?]]


[[お墓の代り? なんで?]]

[[『桜の樹の下には屍体が埋まっている!』って]]

[[ああ……そういう小説があるのよ。別にお墓の代りに植えるわけじゃない]]

なるほど。桜並木は墓場か。言われてみればそんな気もしてくる。

わたしたちは歩道の反対側の土手に腰を下ろして桜を眺めた。桜の陰からおさげ髪の千草さんが出てきそうな気がした。千草さんと小さな息子さんたちがいっしょにお花見をするイメージも浮かんできた。千草さんの息子さんたちはまだ生きているのだろうか。“大破壊”以降、まだ生きている、という前提で家族の話をできなくなった。あるいは、桜の樹の下から出てくるのは千草さんではなく、わたしの屍体、シャロンの屍体であるのかもしれない。



シャロンの首筋に桜の花びらをつけたのは誰だろう。死んだ人ではないだろう。可能性がゼロではないけど、わたしのようなインフォでもなさそうだ。でも、淡く浮かび上がった花びらは幽霊のようでもあった。屍者と生者の区別はどこにあるのだろうか？ 発見されずに眠ったままの人格データは屍者だろうか生者だろうか。行方不明で見つからない人物は？

そんなことを考えているとシャロンが急にわたしの肩をつかんで、わたしに口づけをした。驚いたが、シャロンの力があまりに強かったので、わたしはそのまま目を閉じた。さすがに自分からは唇を押し当てなかった。たっぷり二十秒はキスしたのだろうか。もっと長かったのかもしれないし、もっと短かったのかもしれない。

[[ほら、嫌そうな顔してない]]

シャロンは唇を離すと、また得意げに笑った。あまりバージョンアップをしていないわたしの対物感応だが、それでもシャロンの唇のやわらかさは充分に感じることができた。機械って進化してるんだなーと感心した。わたしも笑った。

[[……日が暮れる前に帰ろうか]]

[[もう？ 早くない?]]

[[やることが残ってるのよ]]

本当は急いでやることなどたいしてなかった。わたしはあまり長い間自制心を保つ自信がなかった。シャロンはマイペースで、強引で、情緒不安定だ。恋愛では独占欲が強く、自分だけを見てほしいと要求するタイプだ。実際付き合ったら、いかにシャロンが留守がちとはいへ、三か月も持たないだろう。シャロンが毎晩のようにメッシュ通信をしてきて、嬉々として今日の出来事を報告するのが目に見えるようだ。一晩でも会えなければ、さみしいと言って駄々をこねるか、ひどくしょんぼりして自室で泣いてしまうだろう。にもかかわらず、シャロンはときどきとてもかわいかった。付き合ったらメッシュでセックスすることになるのかな。人のモーブを借りるのも、政府支給のモーブも嫌だ。このわたしのままで、シャロンと抱き合っていたい。

ローズ・ガーデン・ルームにはベッドがないから、寝室を拡張しなくてはいけないな。

わたしたちは短い遊歩道を一周してから帰ることにした。桜はわたしが元の状態にもどした。部屋の後片付けも後でわたしがやっておくことにした。シャロンはいっしょに片づけたがったが、一人で十分だからと断った。

わたしたちは手を繋いでゆっくり歩いた。シャロンの爪の短い手は温かかった。シャロンはわたしの手を温かいと感じているのだろうか。触感の程度を上げて、わたしのデータもさわり心地のよいものにしようかな。

V^R 空間から V^R 空間への移動は一瞬だ。自室に戻るとわたしはそのままベッドに横になった。目をとじるとシャロンの唇の感触、手の温かさが思い出された。右手が自然と股間をまさぐった。

シャロンとは付き合えないけど、オナニーするくらいはいいだろう。シャロンはどうしているだろうか。シャロンもわたしでオナニーしていてくれればいいのに。あとで、触感や対物感応に関するデータのパンフレットも見よう。進んではいけない方向に進みそうなのはわかっている。でも、それは後で考えることにしよう。



図像に関するクレジット

本書で利用しているイラストは以下の通り。『Eclipse Phase Core Rule』 及び『Sunward The Inner System: A Location Sourcebook for Eclipse Phase』は Post Human Studio LLC よりクリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示 - 非営利 - 継承」ライセンスのもと出版されている。

p7 (この頁) 背景: Zachary Graves
ベースグラフィックデザイン: Adam Jury
レイアウト: 八重樫 尚史

図像に関するクレジットの例外

以下の画像の使用に関してはクリエイティブ・コモンズ・ライセンスに則って管理されているものではありません。図像の無断複写・転載は禁止します。

小説のタイトル図像及びp6 背景写真: ストックフォトサービス『iStockphoto』の写真を使用し、その使用許諾のもと八重樫尚史が加工して作成したものです。もとの写真の著作権は原作者に、加工後の図像の著作権は八重樫尚史個人に帰属します。



クリエイティブ・コモンズ・ライセンス:
「表示 - 非営利 - 継承」 3.0 Unported
Eclipse Phase は、Posthuman
Studios LLC の登録商標です。